

シャンフロ二次

エーゲ海のええ外科医

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

思いついたら更新する。

# 目次

エムル耳搔き	1
ポツキーの日SS	4
サミーちゃんさんいよいよね…	7
ばれんたいん	9

## エムル耳搔き

エムル耳搔き

「サンラクサン！」

やつとテスト終わった……と久しぶりにシャンフロにログインするとエムルが声を掛けてきた。

「おう、エムルか。どうした？」

「サンラクサン、なんだかお疲れですわ？」

「あー、まあちよつとな」

今回のテスト範囲ヤバかったからな……。

てか流石シャンフロ。こんなちよつとした疲れも見抜くとは。

「そーんなサンラクサンにアタシが耳搔きしてあげますわ！」

「ええ…俺水晶層崖行こうと……」

いや待てよ……？ もしやこれ0氏が受けた『ディアレの秘密特訓』みたいなユニークシナリオなのでは？ なら……

「よつしや、頼んだぞエムル」

「はいですわ！」

……

……

……

「あのーエムルさん？」

「どうしたんですわ？」

「なんで膝枕してるんですかねえ……」

「こうしないと耳搔き出来ないですわ」

それはそうなんだが……まさか人形態だとは。確かにいつもの姿だとエムルが俺に乗って耳搔きすることになるからな。それにしても膝枕……膝、ひざ、ピザ。う、頭が……

うっかりトラウマを思い出していると、エムルが耳に顔を近づけてきた。

「今はマナポーションが無くて数分しか出来ないけど、がんばって気持ち良くしてあげるですわ」

いつもの騒がしい声とは真逆の囁くような優しく落ち着いた声に  
一瞬息が止まる。

「それじゃあ入れますわ」

エムルが俺の耳に耳搔き棒を入れる。

思ったより優しい手つきだな…もつとガシガシ削って来るのかと。

「痛くないですわ?」

「ああ。思ったより優しくして驚いてる位」

「それどーいう意味ですわ!?!」

「褒めてんだよ、大声出すな」

「な、なら良かったですわ…?」

上手く丸め込まれたエムルが耳搔きを続ける。

それにしても……

「なんで耳搔きしようと思ったんだ?」

「ほえ?」

「いや、急に耳搔きするとか言い出したからな。なんでだろうって  
な」

「……サンラクサンはいつつも休む暇無いくらい突っ走っちゃうか  
ら、たまには息抜きして欲しかったんですわ……」

息抜き（クソゲー）はしてるはずなんだけど……まあ、エムルなり  
の気遣いってことか……

「ありがとな」

「ぴよえっ!? ベ、別に感謝して欲しくてやったんじゃないですわ

! ま、まあ、その気持ちはありがたく受け取っておくですわ……」

それから少し経ち。

「サンラクサン、なんかうとうとしてますわ?」

……眠い。想像以上に気持ち良くてちよいちよい意識が飛びそう  
になる……

「寝ても良いんですわ。さつきも言ったけど、たまにはお友達の家  
に行かないでお休みすることも大事ですわ。だから……」

エムルが顔を近づけ、耳にふーつと息を吹き込む。

「今日は、お休みなさいですわ、サンラクサン」

ぼやけた視界に微笑を浮かべたエムルが映る。

その光景を最後に俺の瞼と意識は落ちていった……。

## ポツキーのHSS

永遠楽

「らくくーん、こつち向いてー?」

「んー?」

スマホに向けていた顔を隣に向けると我が彼女殿……天音永遠の姿が。その手にはチョコを纏ったステイツク菓子……要するにポツキーが用意されている。

「はい、あーん」

突然のことに戸惑いながらも素直に食べる……うまい。

「なぜポツキー? バレンタインはまだ先だぞ」

「はあ……これだからクソゲーマーは。ポツキーの日ぐらい知らないの?」

「あつたなそんなの。生憎とゲームの期間限定イベントになるくらい有名じゃないと興味が出ないんだなこれが」

永遠は半ば呆れた目をしながらこちらを見ている。と思つたらまたもやポツキーを俺の口に挿し込んで来た。そのまま食べようとすると異変に気付く。

永遠が俺の食べてるポツキーの端を啜えている、俗に言うポツキーゲームだ。

このままだとヤバイ……だが逃げればからかわれることは必至!

どうすれば……いや、ここはあえて、

サクサクサク…

進む!

永遠が驚きで一瞬目を見開く。予想外だったようだな。俺が逃げるに計算していたんだろが甘い! このまま進んで逃げた所をかかってやるわ!

サクサクサク…

あの一永遠さん? なんて逃げないの? もうそろそろ唇が触れ

「楽くん顔赤いよー？」  
……勝てねえ。

紅楽

「楽郎さん！」

「おう紅音か、どうした？」

「今日はポツキーの日らしいですよー！ なのでポツキーどうぞー！  
ずい、と渡されたポツキーをサクサク食べていく。」

「楽郎さん！」

「ん？」

「私にもください！ あー！」

えーとつまり？……食べさせろってことか。

なんだろうな……紅音の赤い口の中が見えてドキドキしてしま  
う。つと、気を取り直して。

「ほい、あーん」

「っ、さくさく……」

「ッ……」

くっ……ハムスターみたいに食べてるところにドキツとしてしまっ  
た。

お、食べ終わったか。

「ごくんっ、もつとくださいー！」

「はいはい」

袋からもう一本取り出し食べさせる。サクサクサク……

「くださいっ！」

サクサクサク……

「くださいっ！」

サクサクサク……

「くださ」自分で取れ！」でもでもっ！楽郎さんに食べさせて貰った  
方が美味しいんですよー！」



むっ……。

ヒヨイ

パクッ

サクサクサク…

「えへへー」

ちくしょう…可愛い…

.....

おまけ サンディープ？

「今日はポツキーの日だよねえ…」

「そうだな」

「そんなわけでサンラクくんのポツキーをぼっく「帰る」冗談だよお

…！」

付き合ってられるか、まったく……。

サミーちゃんさんいいよね…

近所のペットショップにて。

「ペット飼うって、どうしていきなり？」

「楽郎くんは私が居ないとずっとゲームしてますよね」

「そりゃもちろん」

玲の言葉に楽郎は頷く。ゲームが生きがいの楽郎は、玲と二人きりの時間以外はほぼ全てゲームに注ぎ込んでいる。

そんな環境で玲がいなければ延々とゲームにのめり込むだろう。

「あ、ダメと言うわけじゃないですよ？ もともとゲームしてる楽郎くんを見て好きになったんですし……」

「…玲さん、見られてるから」

「ひよえっ!? す、すいませんっ！」

周りの人から生暖かい視線を向けられ赤くなる二人。

「て、そうではなくっ！ 楽郎くん前に言っただじやないですか、さばがん？ というゲームのプレイヤーが病院に搬送されたって」

「あー、言った気がする」

ゲームを終えた後痛そうな素振りを見せる楽郎に、玲が何のゲームかと聞いたことをきっかけに鯖癌の話をしたのだ。

「その人みたいになられたら、私ショックで死んじゃいますよ！」

「さすがにならない……とは言いきれない」

「ので、ペットちゃんの前倒を見るために、途中でゲームを止めざるをえなくなれば、楽郎くんは倒れず私も安心できるという寸法です。できれば叩き起こしてくるくらいのはっきり者の子がいいですね」  
(うーん、理論的には合ってるのになんかズレてるような……まあいいか)

勢いに流された楽郎はお世話お世話になるする相手を探し始めた。

「って言ってもなあ……あ」

虫や魚以外の知識が無く悩んでいた楽郎の視界に一匹の白蛇が映り込んだ。

そいつが入ったケースへ無意識に手を伸ばす楽郎。すると向こう側から白蛇が頭を擦り付けてきた。

「っ……」

「楽郎、くん」

その様子を見た玲が駆け寄ってくる。

「ああ、玲さん。どうしたの？」

「どうして、泣いているんですか？」

「あ？ あれ？ なんて、あんな昔の事……割り切った、筈、なのに……」

ポロポロと涙を溢す楽郎に、玲は何も言えなかった。

「泣き止みましたか？」

「その、ご迷惑を……」

「いいんです。それより、この白蛇さんで良いんですか？」

玲がケースに入った白蛇を指差す。

「うん、こいつがいい。久しぶり……なのかな」

「♪」

「心なしか白蛇さんも喜んでそうですね。それで、名前はとうします？」

「名前……アレでいいかな？」

「……」

玲の目には、楽郎の言葉に白蛇が無言で肯定したように映った。

「な、なんでそんなに通じ合ってるんですかあ……」

「俺にもよく分かんないけど……」

「運命、かな」

ちよつと格好つけすぎたな、と苦笑する楽郎。それと同時に、白蛇の赤い舌がチロリと見えた。

ばれんたいん

新大陸にひっそりと佇むカフェ……『蛇の青林檎』。その一角でサイナ、ウインプ、エムルによる『じよしかい』が開かれていた。

「で、わたしたちはなんであつめられたのかしら」

「サンラクサンには聞かせられないお話ってなんなんですか？」

「…飲茶、返答：時に二人とも、バレンタインというものを<sup>いい質問ですね</sup>ご存知ですか？」

紅茶を啜るサイナの質問に二人は首を傾げる。

「そのバレンタインってなんなんですか？」

「解答：開拓者の間で話題になっていているイベントの名称、女性から普段お世話になっている相手や好きな人物へ菓子類を贈るという内容だそうです」

「ふーん……つまりあいつにおかしおくろうってこんたんなわけね」

「肯定：まあどちらかと言えば<sup>ワタン</sup>当機がお世話してあげてる側ですがね」

「それでお菓子って何を贈ればいいんですわ？」

「チョコレート、という物を贈るのが一般的だそうですね」

「そのちよこれーと？ はどこでうってるのよ」

サイナはウインプの言葉に呆れたように首を振る。

「嘆息……ウインプ、貴方には呆れてインテリジェンスも言えません」

「べつにいわなくていいわよ……」

「手作りってことですか？」

「<sup>その通りでございます</sup>Exacety」

とまあだいたいこんな感じのやり取りを経て、三人はサンラクへ贈るためのチョコレートを作り始めた……訂正、たった今四人に増えたようだ。

「何、<sup>なに</sup>してる？」

「ぴやつ!? てい、ていーあすしえんしえ…」

「バレンタインで契約者<sup>マスタ</sup>へ贈るお菓子作りを」

「(サバイバルが言<sup>ゆ</sup>つてたやつ……)ん、私も手<sup>わたし</sup>伝<sup>てつだ</sup>う。何<sup>なに</sup>したらいい?」

「それでは……これを混ぜて貰えますか」

「ん、わかった」

エプロンに着替え、言われた通りに作業するティーアス。そしてそれを遠目で見守る不審者<sup>着せ替え隊</sup>達。

「ティーアスちゃんがチョコ作りを……!」

「エプロン姿も可愛い…!」

「ツチノコさんツ……! なんて羨ましい……!」

「サバさんが知<sup>し</sup>つたらどんな顔するかなあ……」

「てかティーアスちゃんいつもより楽しそうじゃね?」

「……この話は止めよう」

「「そうしよう」」

……  
数時間後

なるほどなるほど、だいたいの流れは理解した。

いや自分の為にチョコ作ってくれたのは素直に嬉しい、これは本音だ。

だがそれはそれとして少し考えてみて欲しい、明らかに見た目がおかしいチョコを食<sup>く</sup>えと言<sup>い</sup>われてはいと頷<sup>うな</sup>く派<sup>は</sup>は少ないと思<sup>お</sup>うんだ。

「で、なんだこれ」

「ちよこれーとよ!」

「四品中三品が見た目おかしいですけど」

先<sup>ま</sup>ずこのどす黒いビターチョコよりビターっぽいチョコを作<sup>つく</sup>ったのは……

「サイナ、どうしてこうなった」

「逡巡……チョコレートを溶かそうと思いヤシロバードから借り受けた火炎放射器を使用、しました……」

「今日からお前はエセイntenテリジエンスだ」

「絶句」

次！ このチョコバナナならぬチョコ人参を作ったのは……

「エムル、なんだこれは」

「くらビッツ産一等級スイーツ人参のチョコレート掛けくですわ！」

「せめて人参は切つて欲しかったな、せめて」

エムルはまだマシか、そしてこの白い皿が……

「幼女先生」

「……何」

「えつと……何も無いのは何故なのでしょうか……」

そう、この皿には何も乗っていない。透明なチョコだったならまだ良かったが正真正銘、無<sup>な</sup>なのだ。

「作<sup>つく</sup>つてたら……お腹<sup>なか</sup>すいたから」

うん、じゃあしようがない！

いやだって……師匠ポジにあんまり強く言えないし……。

気を取り直して最後！ ウィンプ！

「どうよー」

「そっか料理する奴だったなお前」

ちゃんとチョコレートしてやがる……！ 前三つがアレだったからより輝いて見えるぞ。

よく考えれば唯一の料理担当だからまあ納得。味も……

「どうなのよ」

「うん、うまい」

「ふふんー」

おーイキってるイキってる。まあちゃんと美味かったのですよとしよう。

「よーし解散！」

「待機を推奨」

「どうし…た」

俺を呼び止めるサイナ&エムル&幼女先生。ティーアス

俺はウインプのチョコだけ食べた。

彼女らが手に持つは試食もされなかつたチョコ（？）達。

「成る程？」

レピントリガー 古雷の撃鉄・ハザード 起動！ 最速で店を出「早さじゃ負けない」あつ

…

結果から言うとエムルのは意外と食えた。サイナのは食べたらす  
リップダメージ食らつた。攻撃アイテムとして有能だつた。

でも皿食わせるのは止めてくれませんかねえ!?